

# 化学教育 徒然草



## 教員も協働的に学ぶ

FUKANO Tetsuya

深野哲也

大阪府立和泉高等学校 教諭  
平成 27 年度「化学と教育」誌編集委員



巻頭言

以前、勤務校の若い英語の先生の授業を拝見する機会があった。「宇宙デブリ」に関する英文を読ませた後、問題解決のアイデアを英語で討論させておられた。「宇宙デブリ」という言葉に初めて出会った生徒も多く、ほぼ全員それがどんな意味を持つのか全く知らないところからのスタートであった。しかし、生徒たちは初めて得た情報をもとに意見交換を始めた。その後、同じ趣旨の意見を持つものが集まって考えを深め、英語で発表、英語で討論という展開が繰り返された。その間、その先生は時間を見ながら、生徒の思考の流れを邪魔しないようサポートするだけで余計な口を挟まなかった。英語での発表に対して英語で質疑応答など、一昔前の高校とはずいぶん様変わったものである。コミュニケーション英語という科目ならではの光景であったのかもしれないが、生徒たちの生き生きとした表情が印象に残った。生徒が能動的に授業に参加することの重要性を改めて考えさせられた。後日伺ったところ、多くの先生方で教材や授業の展開方法に関するディスカッションを重ねられているとのことであった。

筆者も若い先生方とともに、いろいろな試みに取り組んでいる。実験班ごとにリーダーを決めさせ、その生徒に実験方法を教授しておき、当日はリーダーが各班を指導する試み、実験結果を予想させる際その根拠を示させる試み、ある課題を解決するための実験方法を考えさせる試み等である。協働的に学ぶ、知識を活用する、新しい課題に意欲的に取り組む、様々な場面を用意し生徒が深く学ぶ場面を少しでも多くしたいと考えている。また、時間をかけて積み上げてきた「講義」の良さも大切にしたいと考えている。しかし、それぞれの良さを満足いくレベルで響かせあうには、まだまだ工夫が必要である。そのためには、まさに教科、学校、校種の垣根を超えて、アンテナを張り巡らせることが大切だと考えている。

いつの世も教育上の諸課題は、教員個々の努力だけで乗り越えるには多くの時間と労力を必要とするし、個々の力にも限界がある。多くの実践交流を通して相互に研鑽を積むことが、化学教育の全体的な向上に繋がる。教員にも協働的な学びが必要なのだろう。その意味でも、本会・本誌が期待される役割はますます大きくなっている。

[連絡先]

596-0825 大阪府岸和田市土生町（勤務先）